陰暦の意味

※現代においてもっとも代表的な月名と一般的な語源説について
語源不詳のものや、諸説あって定説がないものもあるようです。

１月：睦月（むつき） 睦(むつ)び月。「睦び」は睦ぶ、すなわちむつまじくする、仲良くする。 身分の上下なく、老若男女、親族一同が集まって睦びあう月。
２月：如月（きさらぎ） 衣更ぎの意。草木の更生（生まれ変わること）することをいう。 着物をさらに重ね着る意とするのは間違い。
３月：弥生（やよい） 『木草弥生(いやおい)月』から転じたもの。 草木がいよいよ生い茂る月。
４月：卯月（うづき） 十二支の卯（4番目ですね、ウサギ)の月。 または稲種を植える月苗を植える月の「植月」からきたという説。 さらに、この月になると卯の花が咲き卯の花月という説もある。
５月：皐月（さつき） 耕作を意味する古語「さ」から、稲作の月として「さつき」になったいう説、 早苗を植える月「早苗月（さなえづき）」が略され「さつき」になったとする説等がある。 「皐」には「神に捧げる稲」という意味があるため、皐月が当てられたと思われる。
６月：水無月（みなづき） 今の暦では七月頃に相当する。 暑さ厳しく水が涸れてなくなってしまうからという「水の無い月」説、 水無月の「無」は「の」にあたる連体助詞「な」で田に水を引く月「水の月」という説がある。
７月：文月（ふみづき；ふづき） 稲の「穂含月ほふみづき「含月ふくみづき」（稲が穂を含む月）から転じたという説、 七夕の行事に詩歌や書物を奉じる風習があって「文月」といわれる説等がある。
８月：葉月（はづき） 葉落ち月。木の葉が色づいて落ちる月。
９月：長月（ながつき） 夜がだんだん長くなる「夜長月（よながつき）」の略とする説。 稲を刈り収める時期のため、長月の「長」は稲が毎年実ることを祝う稲刈月（いなかりづき）」 「稲熟月（いなあがりつき）」「穂長月（ほながづき）」の意味からといった説などがある。
１０月：神無月（かみなづき；かんなづき） 神(かみ)な月。神の月。八百万の神々が 出雲大社に集い国を留守にする月。 恵比寿神は留守番に残るとか。出雲では神有月というらしい。
１１月：霜月（しもつき） 霜降り月；霜が降りる月。
１２月：師走（しわす） 十二月は年末で皆忙しく、師匠の僧がお経をあげるために 東西を馳せる月と解釈する師馳す（しはす）という